

郷土かみのかわの歴史・文化財

上三川の地域と歴史 鞘堂

鞘堂は、町域の西北部、田川と姿川に挟まれた台地上に位置しています。北側は宇都宮市茂原町、西側は下野市下古山とその境を接しています。地区の西側を日光街道（現在の国道4号）が南北に通っており、北関東自動車道の高架から少し南側には、日光東往還との合流地点があります。

元禄6年（1693）頃の宇都宮藩の記録に、鞘堂村の名前があります。元文5年（1740）には、下総国関宿藩領となり幕末へと至ります。天保年間（1830～1844）の家数は13戸で、

石橋宿の助郷役を課されていました。地区の鎮守は、星宮神社です。

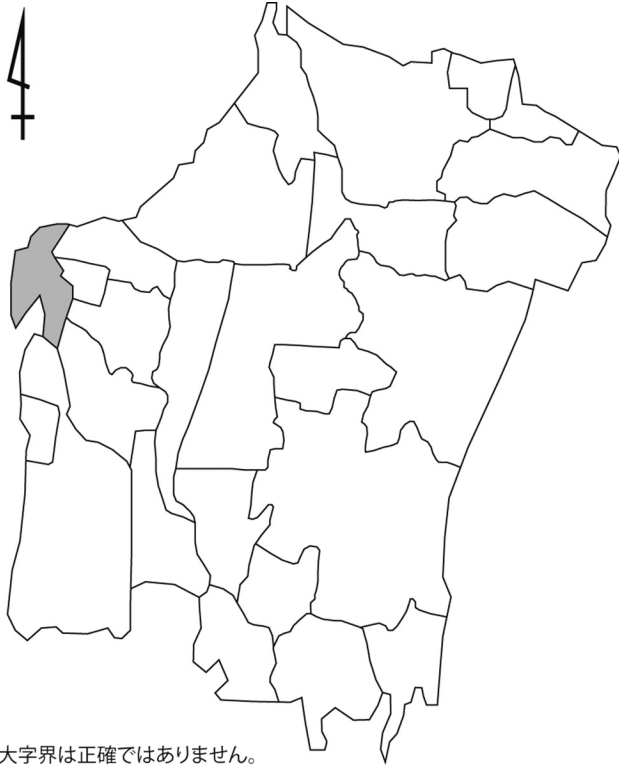
さて、「鞘堂」という地名には、歴然とした由来があります。それは今からおよそ640年前、時は動乱の南北朝時代にまで遡ります。康暦2年（1380）、宇都宮市茂原町付近にて、当時下野国内の勢力を二分していた宇都宮氏と小山氏による戦いがありました。後に関東一円の武將を巻き込む「小山義政の乱」の発端となったこの戦いは、「茂原（裳原）の合戦」と呼ばれます。

宇都宮軍約2万に対して、小山軍は約7千と半分以下の軍勢でしたが、小山義政が夜襲をかけて宇都宮城主基綱を討ち取り、小山軍の勝利で幕を閉じました。余談ですが、この合戦には、宇都宮方として上三川城主横田師綱・伴業親子も参戦していましたが、この時に負った傷が元で、今泉氏への城主交代を余儀なくされたといわれています。

この合戦による戦死者は、両軍併せて280名にもなりました。村人達は、その供養のために戦死者の太刀の鞘を拾い集めて埋葬し、その上にお堂を建てて地蔵尊を安置しました。そのため、このお堂は鞘堂地蔵尊と呼ばれており、これが地名の由来といわれます。

鞘堂地蔵尊は、日光街道沿

いの鞘堂公民館のすぐ南側にあり、今も戦死者の霊を慰み続けています。昭和の初め頃までは、お堂の参道に縁日の屋台が立ち並び、大変な賑わいを見せていました。初夏の香り漂う今日この頃、往時の日光街道に思いを馳せつつ、お弁当片手に出掛けてみてはいかがでしょうか。



※大字界は正確ではありません。



鞘堂地蔵尊

【家庭でできる節電のポイント】電気ポットのつけっぱなしには要注意。長時間使用しないときはプラグを抜きましょう。